

---

# このこのこ！～男の娘のこんな日常～

トミー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

このこのこ！〜男の娘のこんな日常〜

### 【Nコード】

N7675Z

### 【作者名】

トミー

### 【あらすじ】

私立天翔学園高等学校 この学校に入学したのは、どこにでもいるような男の娘！？

## プロローグ 「主人公は××系」 (前書き)

不定期更新になりますが、よろしくお願い致します。それじゃ主人公のアカリちゃんヨロシク。

「僕の名前は、アカリじゃないです。えーっと、このセリフ読めばいいんですね。こほん、青春に必要なのは 「友情」 「ラブコメ」

「男の娘」 ……って僕は男の娘じゃないーい！！

## ブログ 「主人公は××系」

「月アカリさん好きですっっ！！付き合ってくださいっっ！！」

2011年 春 4月も終わりに近づき今年僕は、必死の受験勉強の結果無事合格した「私立天翔学園高等学校しりつてんしょうがくえんこうとつがくぶ」の体育館裏に呼び出されて今まさに告白された。

「無理です。」それを僕はソッコーで断る。

「・・・えっ？」

「それじゃあまた明日。」

僕は今告白断った田中君（多分）の横を通り過ぎようとして「ちょっと待ってください！」田中君（多分）に道を塞がれた。

「どうしてですか！？せめて理由いやっ少しでいいから考えてくれま」無理です。本当に。「僕は、さっき告白を断ったときより早く返事をする。」

「だからなんでっ」

「落ち着いて、別にぼくは田中君のことを嫌ってないし嫌悪感すら持ってないよ。逆に友達になりましようって言われたら嬉しいくらいだし。」

「じゃあ友達以上にみえないってこと？後、田中じゃなくて田代です。」と田中君じゃなくて、ええっと田代君だ。は冷静にツツコミをいれながら聞き返してきた。

「いや・・・その・・・なんというか・・・その」実は僕、この手の告白は中学生時代からなれている。しかし、理由の説明だけはどうしても



――――っ！

もう、嫌だ逃げ出したい。てゆうかそんなに僕のこと見てるなら理由にきずけよっ！別にその理由隠してないし、なんで逆にきずかないの！！？もおー！ー本当に。これはもう腹をくくるしか無いのか！！

「月さん、お願いします。振られるのは仕方ないけれど、理由もなしに振られるのは嫌です。」田代君は、追い打ちをかけるように迫ってきた。いや、だからさ理由聞いて傷つくレベルがもう核爆弾並みなんだよ経験から。

「う、あ、その、あの、いや、」

「月さん！」・・・もう無理、この状況もう無理。

僕は腹をくくった。

「田代君。」

「はい。」

「・・・僕苗字月じゃないし、名前もアカリじゃないんだけど。」

「・・・えっ？」

「・・・僕の苗字が月明狩なんだ。」

「・・・すっすいません、いつ今までできずかなくて。」田代君が慌ててあやまる。逆に謝りたいのこっちなんだけど。

「いやっ、いいよ。よく間違われるし。」本当に。

「そうなんですか？」

「そっそれで、本当の名前が、その、えっと。り、っ、って言うんだけど。」

「えっ？すいません聞こえませんでした。」

「・・・りゅ、」

「えっ？」

「・・・りゅと」

「はいつ？」

「ぼっ僕の本名は、つきあかり月明狩りゅと竜人」

「・・・！」 田代君はようやく気がついてくれた。

そう、僕、つきあかり月明狩りゅと竜人が

男だということに。

## 第一話 「幼馴染は狼系」

2011年4月26日（火）

「んーっ・ふう。」僕は自室で大きく背伸びをした。

「さ・て・と。」ピピツと鳴った携帯のアラームを素早く止めて、時間を確認した。

AM 4時30分

「よし、時間ぴったし。」これは僕の癖で、アラームが鳴る1分前には起きて背伸びなんかしたりして本格的に準備をしようとするものだ。

そして、なんでこんなに早く起きるかと言うと僕には色々仕事がある。

「今日のお弁当はどうしようかなあ。」僕は鼻歌を歌いながら、寝巻の上からポンチョを着てつぶやいた。

「セイヤはもう少しお肉食べたいって言ってたけど・・・栄養バランスかんがえとなあ。」

セイヤと言うのは僕の幼馴染でれっきとした女の子なんだけど・・・まあ説明は後にして、やることやんなくちゃ！

「んーと、昨日はハンバーグだったから少し焼かなかったあまりがあるから。うん、ピーマンの肉詰めにもするか。後他にも・・・」そんなことを考えながら、洗濯機のあるお風呂場に行く。

「その前に、洗濯物干さなくちゃ。」すぐに頭を昨日の天気予報に切り替える。確か今日は、晴れだったはず。一応テレビをつけて、確認する・・・うん合ってた。

「お姉ちゃんは、またお昼過ぎに起きるんだよねー」冷めても美味



しいものって難しんだよね。」「軽くため息を吐く。

時間後

）  
1

「ふう。」「僕は、あさの仕事を一通りかたずけてココアを飲んでいた。

「全く、セイヤはあれほど何回も注意してるのに下着を洗濯機に入れるんだから。」「ぶつくさと文句言いながらココアを一口飲む。うん美味しい。

「僕だって思春期の男子なのになあ。」「本当は狙ってやってるのかな？ いやないか、そんなことしてもあまり意味ないしね。

「多分もう無意識のうちにやってるんだろうな。」「まあその理由もわからなくもない。ふと、窓ガラスに写った自分の姿を見る。

そこには、寝巻き姿の上にポンチョを軽く羽織った髪の高い綺麗な美少女がいた。

「………てゆーか、僕なんだけどね。」「はああああああ

ああ 口に出すとなお落ち込む。

そう、僕「月明狩竜人」<sup>つきあかり りゅうじん</sup>は見た目は完全に女の子だ。

この見た目のせいで、僕は大変な思いをしてきた。例えば、昨日の田代君のような例 あれが一番困る。なぜなら、A君と言う人がいたとする。A君と僕は普通に仲良くしているとする。同性なんだから当たり前だろう？ それなのにA君は完全に僕のことを女の子だと思う。僕の通っている「天翔学園高等学部」<sup>てんしょうがくえんこうとうがくぶ</sup>略して、「テンガク」はそれなりにマナーを守っていれば私服登校OKなのだ。僕は数少

ない制服組みで、この見た目との相乗効果でさらに目立ってしまう。しかし、この時代「ボーイッシュ」と言うような言葉もあるし、「ボクっ娘」と言うことばもある。簡単に言ってしまうえば、僕を女の子と勘違いするのは当たり前というものだ。しかし、自分のほうから「僕は男だからね。」と言うのもなんかプライドみたいなものが許さない。そんなこんなで僕は、週2のペースで告白されてしまう。・・・男子から。ちなみに、僕の幼馴染が僕のことを「アカリ」と呼ぶのでよく本名を「月<sup>つき</sup>アカリ」と勘違いする人も多い。

「まあ、後数週間すれば僕が男だつてことが分かってくるだろうな。経験からして。」僕は、ココアを飲みきつてかたずける。今の時間は5時38分まだ時間はある。

「さてとお風呂にでも入ろつと。」僕はお風呂場に向かった。僕は、お風呂が大好きだ。細かく説明すると髪を洗うのが好きだ。そのため、特性リンスを作ったりして髪の手入れは欠かしたことがない。こつゆう所も、セイヤに女の子っぽいといわれるけど。好きなんだから、しょうがないしょうがない。

「ん〜んん〜んんん〜んん〜」僕は服を脱ぎ始めながら鼻歌を口ずさむ。そしてシャワーを浴び始めて、髪を洗おうとシャンプーに手をかけたとき・・・

「あつ」しまった、着替えを忘れてしまった。けど今脱いだ下着着るのもなあ。

「仕方ないか。」僕は、シャワーを止めて体と髪を軽く吹いてバスタオルを体に巻いて自分の部屋に戻った。

ガチャツとドアを開けたとき、ふと違和感があった。

「・・・・・・ベットが乱れてる。」それだけじゃない、下着をしま

っているタンスが少し開いている。さらにベランダの窓が開きっぱなしだ。洗濯物を干したとき鍵を締め忘れていることはじつは多い、しかし学校に行く前わ必ず確認するので防犯に関しては大丈夫。だけど、窓を締め忘れるなんてありえない。そして決定的なのは・・・

「・・・は・・・あ・・・はあ・・・」

微かに聞こえる人の呼吸音しかもクローゼットから。

「・・・（ゴクリ）」僕は少し緊張しながらもクローゼットに手を掛け・・・思いっきり開けた。

そして・・・そこには・・・

「・・・」

「・・・何してんの・・・セイヤ」

「・・・ワン」

「・・・」状況整理中。シバラクオマチクダサイ・・・

目の前にいるのは「澄空<sup>すみぞら</sup>星夜<sup>ほしよ</sup>」俺の幼馴染で通称セイヤ 一人称は「アタシ」

少し赤みがかったショートヘアで結構傷んでいる イメージとしては「犬系少女」というより「狼系少女」 胸はとも残念 セイヤの家は隣でベランダとベランダの間は１メートルも無いジャンプして渡れる距離だ しかもセイヤは成績と反比例するほどスポーツ万

能で「テンガク」にギリギリ合格したのも奇跡だと思う・・・  
・・・うんだいたいこんなもんかな。よし！！

「セイヤ」

「・・・なつなにアカリ」

「いくつか質問していい」

「うっうん」

「質問その１ベットが乱れてるけどなんで」僕は淡々と質問する。

「さっさあねえなんでだろうね！アハハハハ」セイヤはわざとらしく笑った プチッ

「そう・・・質問その２・・・僕の下着をしまってるタンスが少し開いてるんだ。それでさあその手に持つてるの何？」僕は続けて質問する。

「あの・・・その・・・あーーーーーいつのまに！」セイヤは大げさに僕の下着を見てリアクションを取る。 プチッ

「じゃあね最後の質問いい」僕は冷たい声でセイヤに聞く。

「なつなに」セイヤは怯えた声で返事をする。

そしてきっぱりと僕は言う。

「死ぬ前に何か言いたいことある」

「・・・・・・・・」セイヤは凍りついた。

「さあ、早く」自分でも信じられないほどの怒りを抑えるの難しいから早くして欲しい。

「・・・・・・・・分かった。アカリ聞いてくれ。」

「っ！ なっなに。」急に真面目になったな、もっもしかしてわざとじゃなくて何か理由があったとか

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・アカリってやっぱり大事な所隠すと百パーセント女の子だよな。」

「へっ！？・・・・・・・・あっ」今の自分はバスタオル姿と言ったことを忘れていた。

「いやーーーー！！眼福 眼福」

「・・  
・」ブツチン

「えっ、今の音」死ねーーーーー  
「ーーーーー」っつこの変態オカミーーーーー  
「っつ」僕は机の上の分厚い参考書を思いっきり叩きつけた。

「ウォーレン」

## 第二話 「運命の少女は毒舌系」

2011年4月26日（火）

「すいませんでした!!」セイヤが土下座している。

「知らない!!セイヤなんてもう知らない!!」僕は、自分でも分かるぐらい目に涙を貯めて起こっていた。

・・・あつ、ちなみに土下座してるほうがヒロイン（一応）で怒ってるほうが主人公（一応）です。普通逆だと思っけれど、まあ色々あるんです。

AM7時03分

セイヤに一撃くらわせた後、さすがにやりすぎた・・・とは思わず。とりあえず僕の部屋にセイヤ改めこの犬っこを置いておく。また何かされそうなので、ロビングのソファに放置していた。それ約1時間後セイヤが復活した。

そして、第一声が「うーん、よく寝た。さてアカリの部屋あさりに行くか。」んで、直後僕がいることに気がついて僕とのやり取りを思い出して、冒頭のシーンにつながる。

「なんで起きたら僕の部屋をあさりに行くんだよ!」

「本当にごめん!」

「知らないったら知らない!」

「とりあえず、お願いだから朝ごはん作って!」

「今言っことかー!っ!!!」

「だって、アカリがアタシの分の朝ごはん作ってくれないんだもん!」

「今そんな話してないでしょう?!」

「じゃあ、なんの話？」

「だ〜か〜ら〜!! はあもついいや。」怒り疲れてどうでもよくなってきた。

「じゃあ、朝ごはん作ってくれる？」この犬ところ。

「罰として朝ごはん抜き!!」

「ワオーーーーーー!!」

ここまでの状況説明・・・朝から飼い犬のしつけをしています。

「クウン クウン」

「全く、なんであんないたずらするかな本当に。」

「ワン?! ワンワンワンワンワン」

「落ち着け、完全に犬化してるぞ。」冷静に突っ込む。

「スーハー スーハー・・・あーあーよし戻った。アカリさ、一応アタシ高一女子なんだよ!」深呼吸で戻るんだ。

「だからなに。」

「いやいやいやいや! だから・・・その・・・なんでそんなことしたかを聞かない?」

「うーんそういえば、じゃあなんで?」

「えっ!!」

「えっ、じゃないでしょう。朝忙しい時にあんなことして、何か理由あるんでしょう? ほら行ってご覧もう怒らないから。」第一聞けと言ったのはセイヤのほうだ。

「いや・・・その・・・だから・・・あたしは・・・あなたが・・・すく（ピピピピピピピ） なっなに」

「あつ時間だそろそろいかなないと遅刻しちゃう。行くよセイヤ。」携帯のアラームを止めて言う。

「えっいやまだ理由言っていないし、着替えてないし、何より朝ごはんは?」



「だからないよ。」

「ウォーリーーーン」

「先行くよ。」

「ワンワンワンワン」

「いつてきまーす。あつ鍵いつもの植木鉢のしたにあるから。きちんと戸締りよろしくね。」そう言い残し駆け足で家を出た。

「ワンワン」 「ボタン」 さて急ぐか。

「テングク」は大通りに出れば、直線で距離もそんなに無い。しかし、その大通りにでるには僕の家と「テングク」の位置の関係上逆方向にそこそこの道を歩かないといけないのだ。そこで僕は・・・

「仕方ない、時間ないし」 「暗闇通り<sup>くわんやみどろじ</sup>」を通るか。「暗闇通りと言うのは、学生などが遅刻しそうなときに使う裏道だ。ビルと雑木林に挟まれていて、いつも暗いのでその名が付いた。学校側はひったくりなのが多い・不審者が出るなどの理由で通ることを禁止しているが、背に腹は変えられないのでその通りを使うことにした。

「ここが暗闇通りか確かに暗いな。」実は僕この暗闇通り使うのは初めてである。

「なんせいつもは、余裕をもって家から出るもんな。」ちなみにセイヤはいつもギリギリでこの暗闇通りの常連らしい。後、セイヤのご飯はいつもはきちんと作ってはある。

「飯抜きは少しひどかったかな？」ふと、走りながらそんなことを考えていた。

「いやいや、あんぐらい当然だよ全く。」あんないたずらするなんて。

「そつえば、いたずらの理由なんだったんだろう?。」まあいいか。

そして暗闇通りを4分の3ほど通り過ぎたかなと考えていた頃。いきなり後ろから声をかけられた。

「おい！そのねえちゃん！」・・・無視して走る。

「お前だよ、その学生服のお前！」・・・はあ、分かっているけどやっぱり僕か。

「・・・なんですか。」動かしていた足をとめて後ろを振り向くと、どこにでもいるような。したっぱAみたいなおじさんがいた。「ちよつと、金貸してくんないかんあ。困ってんだよ。」うわあ、ひくぐらい典型的なカツアゲのセリフだな。後、カツアゲするやつは性別ぐらいきちんと見極める。

「・・・残念ながら僕お弁当派なんで、購買用のお金すら持って無いんですけど。」

「んじゃあ、手間が省けたな。」

「はっ?。」

「金が無いんじゃないしょうがねえ・・・体で払ってもらおうか。」パチンとしたっぱAが指を鳴らすと雑木林から7人ほど似たような奴らが出てきた。そして最後に、がたいのでかいグラサンをかけたいかにも「一番強くて偉いですよ」オーラを出したボスみたいな人が出てきた。

「あゝなるほど、そうゆうことですか。」

「そうゆうことだよ、ねえちゃん。物分かりいいじゃないか。」したっぱAに代わってボスっぽい人が口を開いた。

「そうですか。・・・つまりここに居る皆さん僕のストレス発散に付き合ってくれる。・・・そういうことですね。」僕は少し笑顔でいった。

「」「」・・・「」「」数秒の沈黙。

「ククク・・・あつはっはっはっはっは」ボスっぽい人が笑い、それに続くようにしたっぱたちも笑い出した。

「馬鹿かお前、恐怖で頭おかしくなったのか？」

「いえ、全然」

「あつ！！」少しキレた様子で声を上げる。

「第一僕は、結構頭の良い学校でそこそ上位常連組なので頭は良いほうですよ。」

「そうゆうこといつてんじゃ・・・あゝなるほど。」

「どうかしましたか？」

「残念だがその手にや乗らねーよ。お前俺様の直感だが格闘技かなんか出来るんだろう。」

「ええっ・・・まあ・・・そこそこ。」意外に鋭いなボスっぽい人。

実は僕父親が格闘家で一応基礎は小さい頃叩き込まれた。

「つまり、お前は複数対一人でもズブの素人の集団にやられるわけないと考えているんだな。」

「ええっと・・・近からず遠からずですかね。」

「残念だったな、俺たちは素人じゃねんだよ。俺たちは全員格闘技経験者だ。」

「あつそうですか。」そろそろボスっぽい人の説明あきたなあ。

「さらに教えてやるよ、俺の通り名を。」

「通り名？」そんなもんあんのか意外に強いのかもしれないなこのボスっぽい人。

「俺の通り名は「月の狩人」だ！」

「・・・」

「どうだ驚いたか、あの伝説の不良は死んでなんかったんだよ。」

ちなみに簡単に説明しておく。「月の狩人<sup>つきかりゆうじん</sup>」と言つのは、2年前1年しか活動しなかったのにこの街の不良・ヤザ・指名手配犯などの無法者達を問答無用で病院送りにし突然姿を消した死亡説もある伝説の不良だ。

「……………」

「どうした、驚きすぎて声もでなくなつたか。」

「あの、言はずらいんですけど。」

「なんだ？」

「あなた「月の狩人<sup>つきかりゆうじん</sup>」じゃないですよ。」

「なつなんだとー!!」

「だって……………」

「そう、そのとうりだ黒髪意外ブス女！」

「だつ誰だ。」うん、確かに誰だ今俺しゃべってたし黒髪は認めるけど女じゃねえし。それ以前に、とんでもないこと言わなかったか？

そんなことは露知らずカツアゲグループに割り込んできたそいつは間髪いれずに話し続けた。

「いいか「月の狩人<sup>つきかりゆうじん</sup>」はてめーみたいな××が小さい代わりに図体でかい 野郎じゃなくてその黒髪意外ブス女より少し小さくて

その黒髪意外ブス女の真逆の色でてめーみたいな 野郎の色の髪とは比べ物にならないほど綺麗な白髪で爪はてめーみたいな

野郎の豚足とは比べ物にならないくらいとても鋭く大きく美しんだよこの「ピーーーーー」で「ピーーーーー」な「ピーーーーー

—————」が分かったら「ピーーーーー」しながらとっとと帰れ「ピーーーーー



「……………本当です。」

「……………」

「……………」

「そうかじゃあな。」

こうして僕はセイヤが来るまでその場に立ち尽くして、一緒に遅刻した日。

僕は出会った 出会ってしまったんだ。

曇日陽射くもひやうせきというある意味運命で結ばれた女の子に。

### 第三話 「転校生は知り合い系」

2011年4月26日（火）

「んで、こうするとこの公式に当てはまると言つことだ。ここテスト出るからな。」

きんこんかこんこん

「うつし、授業終わり。解散、あー腹減った。」男の数学教師は、テキストに終わりにしてクラスメイト達は昼ご飯のしたくをする。

ちなみに今は説明するまでもなく昼休み。

さてと、僕も昼ご飯にしようかな。

ダダダダダダダダダダ ガラガラバン 「アカリ、ごはん」犬がやってきた。

「澄空さん、何回言ったらわかるの。廊下は走んないの。」

「だってだって今日アカリ朝ごはん作ってくれないしさあ。」

「自業自得」

「うーおかげで今日の抜き打ち小テスト1問も解んなかったよ。」

「いつものことでしょう、全く澄空さんは少しも勉強しないの?」

「うん!」この犬っころ、元気に返事する場面じゃないだろう。

ちなみに僕とセイヤは1組と6組で離れているクラスなので、家にいるとき意外は昼休みと帰り道しか一緒にはいない。

「あとさあアカリ。」

「何?」

「その澄空さんってやめてくれない？」

「なんで？」

「なんでって、いつもはセイヤだから調子狂うし。なんか……こう・ムズムズするし。」

あーそういえばきちんと説明してなかったな。

「澄空さん耳貸して。」

「あっうん。」

（だってセイヤって呼ぶと色々噂が立つんだよ。）

（噂なにそれ？）

（僕とセイヤが付き合ってるって噂。）

「えっ！アタシとアカリって付き合ってたの！！」ズコッ 相変わらず理解力の乏しい犬ところだな。

「いや、そうじゃなく、つつつまり、アカリがアタシを犬扱いするのも今朝の参考書アタックもそーゆうことをするまえの訓練いや調教！つまりアタシがアカリの本当の犬になってワンワンする日いつか来るってことつまり……」

なんかセイヤがブツブツ言い出したりハアハアしだした。

「おいセイヤ。」

「さらに……して……だから……」

「セイヤー！」少し声を強めて呼ぶ。

「はっはい！第一希望は普通でアカリの部屋がいいです。」

「セイヤなんの話してんの？」

「いいや……その……そっそういえば、アタシ達いつから付き合ってたの！？」はあ、やっぱり理解してなかったか。



「付き合ってないよ、そうゆう噂が流れるから親しく呼ぶのは止めてって話でしょう。」

「・・・へっ?・・・そうなの?」残念そうにセイヤは聞いてきた。

「そうなの。」ぼくはきっぱり言う

「・・・うゝゝゝアカリ!ごワン。」あつ少し犬化した。そしてなんで機嫌が悪くなるんだろう。

「ハイハイ、ご飯ね。」

こうして、僕の昼休みが始まった。

「そういえばアカリ、「暗闇通り」でなんでブーツとしてたの?」

「別に理由なんてないよ。しいて言うならなにか忘れ物ないかな、とか考えてただけだよ。」そっけなく返す。

「嘘でしょう。ダメだよ嘘ついちゃ。」あつさり見抜かれる。

「相変わらずの、野性の勘だな。」こいつは、嘘を見破ることに關してはもはや神の域だ。

「でっなんで?」

「・・・教えない。」

「えゝゝゝゝ。」不満そうに声を出す

「ごめんね。」だって、不良に絡まれてたら女の子が毒吐いて不良を追っ払ってその上この学校のこと聞かれてその女の子がきた方向だと言ったら疑われて・・・なんて言いたくない。

「そう・・・ならいいや。」こういうところは、セイヤのいいところだ。あまり人に聞かれたくないところは、野生の勘ですぐ気がつくから深く追求してこない。

「お詫びに、今夜は好きなもん作ってやるよ。」

「本当!それじゃ唐揚げ食べたい。」相変わらず肉食系だな。

「ハイハイ。」

そんな何気ない会話をしていたとき言った次のセイヤの話は僕の体

温を3。ほど低くした。

「そついえば、こっちのクラスにね転校生が来たんだ。」

「……」

「どうしたのアカリ？ 滝みたいに汗かきはじめて。」

「……いや……なんでもない……」まさかね、そんなわけないよ。第一「テンガク」の場所聞かれただけだし決めつけるのは早い。

「そつそれで、転校してきたのがすんごくかつこいい女の子で……つてどうしたの！？ 机にうつ伏して！ 大丈夫？！」

「……うん……大丈夫……」そうだまだ希望はある。かつこいい女の子「毒舌さん（仮名）」とは限らないし

「うつうんそれでね、その転校生アタシたちより遅くつてね3時間目ぐらいに来んだ。なんでも道に迷ったらしくつて、でも「テンガク」は大通りににめんしてるから普通迷わないはずなのにね……つてどうしたの！？ 固まって、今にも崩れ出しそうな状態になって！」

「……いいから……続けて……」信じない、僕は絶対信じない。

「でつでね、その子の言った自己紹介の最後の言葉がよくわからないの。」すごく嫌な予感がする。

「ねえ、アカリ「ピー……」ってなに？。」

「ダウト――――」

――――ツツ――――

間違いない毒舌さんだ！

「いきなり大声上げてどうしたの？」ナニ ドーシタ ケンカカ

ガヤガヤ ワイワイ

「ほらっ周りの人たちもいるし。落ち着いて。」

「セイヤー!!」

「はっはい!!」

「ゼー——————ったいその転校生には近づくな!!」

「えっなんで？」

「なんでも、わかったら返事!!早く!!じゃないと晩ご飯野菜炒め!!」

「ワッワン!!」

「ならいい。」

そうだよ、仮に毒舌さんが同じ学校にしようが同じ学年にしようがセイヤと同じクラスにしようが関わらなければ万事解決じゃないか  
きちんとセイヤにも注意したし、第一セイヤと毒舌さんのクラスは  
6組僕のクラスは1組合同の移動授業でも一緒になることなんてないし、めったなことがない限り毒舌さんと会うわけなんてない。

「そうだよ。僕が気にしすぎなんだ。」

「・・・あの・・・アカリ・・・ちよつといい？」

「ん？なに？」

「その・・・言いにくいんだけどさ・・・だからね・・・あのー・・・」

なんだよと問い詰めようとしたとき。

「ワリーな星夜遅ほしよくなって。」

セイヤがビクウとなって聞き覚えのある声が聞こえた。

「いやーこの購買以外に人気あんのな、おかげで前にいる邪魔な

「やっらのせいで遅くなっちゃったぜって……」

すんごく目が合った・ ・ ・

「おおっ！？今朝の黒髪！！」つかさ、てめーなんで星夜と一緒にんだ？」

「それは、こちらのセリフです。」冷静にカウンターツツコミをいれる。

「ん？俺か、いや——実はな……」

まとめるというだ

両親の都合で、変な時期に転校となってしまうしかも大遅刻。てんぱってしまっただうすれいいかわからなくなってしまうのを毒を吐いて全員ドン引きしかしセイヤだけは変わらず（意味がわからず）普通に話しかけてくれて友情成立と・・・

「これであつてる？」

「ああ、あつてゐるぜ。」

[illegible]

「い、いやーすごいねアカリ簡単にまとめちゃうなんてさすが学年順位上位常連組ほんとにすg「晩御飯野菜炒め決定!!」」

「ウォー————ン」ボタン セイヤ ノックダウン

そくだよ、忘れてた。この犬ところ、人と仲良くなることについては嘘を見抜くことより得意（無意識）なんだった。こいつ3時間め

と4時間目の間に仲良くなりやがった。

「なるほどお前が星夜の言ってた幼馴染か・・・なんか女っぽいな。男の娘ってやつか」さらりと気にしていること言いやがった。

「僕は男の娘じゃないです!!」

「なんだよやけに警戒心むき出しだな、俺なんかしたか?」

「今朝のこと覚えてないの!!」

「えっと・・・」

「僕に対して「黒髪以外ブス女」って言った!」

「あゝ言っただな」

「この・・・いい加減に!」

「ゴメン」

僕の怒りが爆発しそうになったとき毒舌さんは深く頭を下げてあやまった。

「・・・えっ?」予想外の行動でフリーズする。

「本当にゴメン、あの場合その場に居た全員に毒吐かないと効果薄くなっちゃうんだ。仕方なく言っただとはいえ、本当にゴメンなさい。」

「・・・・・・はあ・・・・・・わかったよ。もう

いいから頭上げて。」

「でも・・・」

「いいから」毒舌くんは頭をゆっくり上げた。その顔はとても反省していた。

「もういいよ、僕も少し熱くなりすぎた。それに助けるために毒吐いたんでしょ?思ってたほど悪い人じゃないし。」変な人だけど

「そうか、ありがとう。・・・それじゃあ改めまして曇日陽射だ。」  
くもりび ひやうし

ヒザシと呼んでくれ。」ヒザシは笑顔でてを差し伸べた。

「うん、よろしくヒザシさん。僕は月明狩竜人」僕はヒザシと握手  
つきあかり りゅうじん

をした。

「ああ、よろしくアカリ。」

「アカリじゃないです！」

これがクラスメイトがいる中で、すんごく恥ずかしいやり取りをしたヒザさんとの、きちんとした出会いだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7675z/>

---

このこのこ！～男の娘のこんな日常～

2011年12月26日20時49分発行